



戀想屋里長
第一話

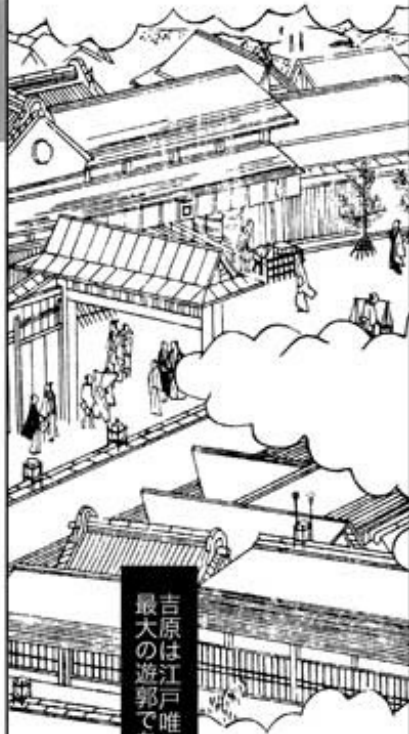
～懸想屋里長～

海のまぼろし

亀谷キヤ子



一日十画の落しやいり



吉原は江戸唯一の公娯であり最大の遊郭である

師走

里長

この時期は世間同様吉原もあわただしい



やだねエ
大門の前で偽の
玉章並べてサ

正月二日の
年礼に向けて
女郎衆も客の
確保に大忙し
だからだ

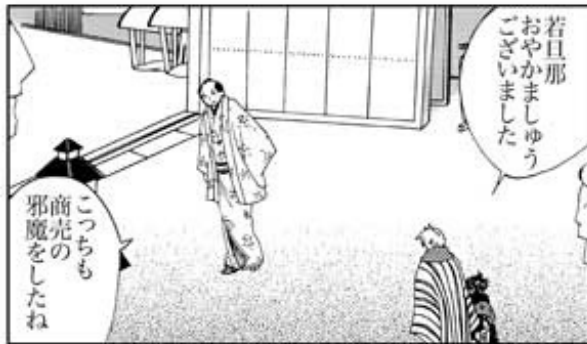
へへ
店がねエもんで

年礼...一年の初めの営業日で時代も二倍になる











ここでは皆
そんな覚悟をして生きているんだから

コレサ
楓や

一体どこまで
お見送り
していたのだエ

花魁
すまねエ
オイラが
若旦那の足を
止めちまつた
んだ





病みついた女郎ほど悲惨なものはない



女郎は前借金という身代金で買われた身だ
つまり借金を返せない手間のかかる病人は用無し



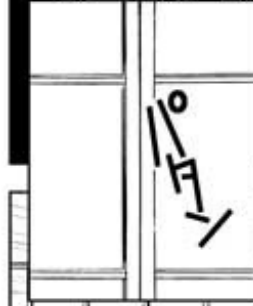


ゴホッ















冗談…？



浅霧が語った
途方もないことは



オレにとつては
至極単純な
話だった



里長さん
わつちはお前の思う
以上に途方もない
ことを
考えているのかも
しれぬよ

若旦那に
身請してもらって

吉原から
出ることに









女郎の手紙なぞ
誰が本気で読むものか

会いたいやら
恋しいやら

命
命だ



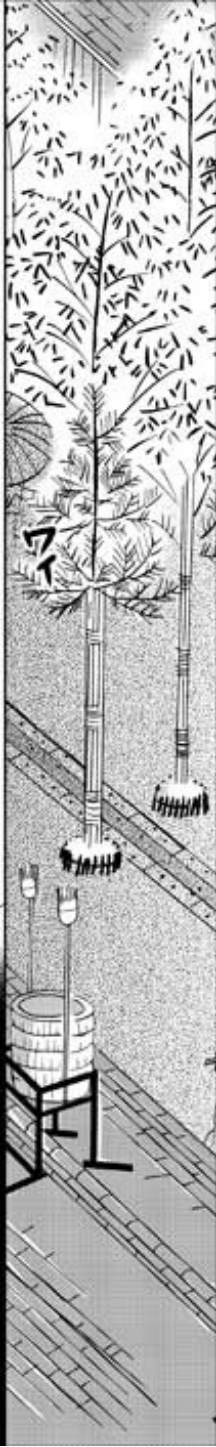
それが今回は
まるで違う



若旦那

あ

決まり文句を
並べて売って
なんて気楽な商売だろう











違う

浅霧は
引き上げて
ほしかつた
だけだろ
う



この
海の
底
から





いつそ
ここを出て
自由に生きや...



また
勝手に
ここに
来て

勝手に
怒られ
んすよ



お前は
まだ...

沈んで
ねえ...



あ、
お前はそうやって
一人でどこでも
行ってしまおうから





決めてたのに



もう
逃げない
つて




お前は
託したのか



ささ

それも
違うだろう

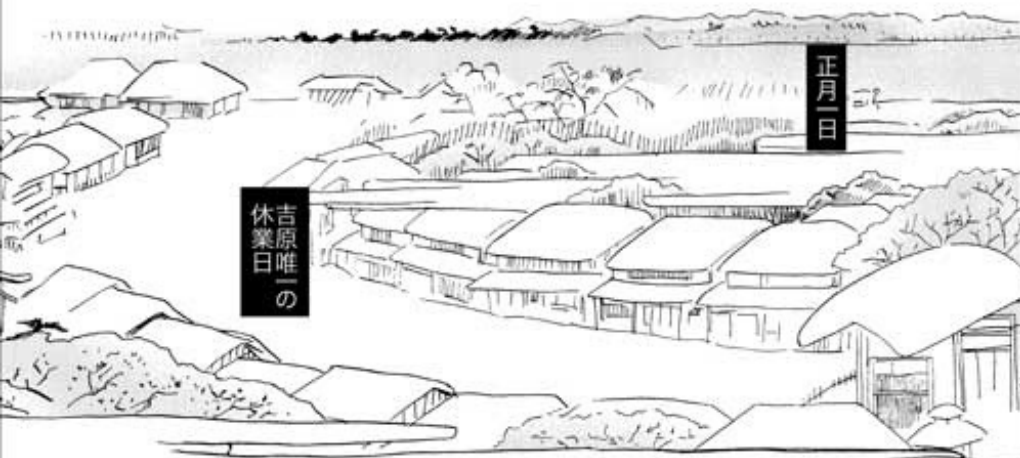




浅霧は

自らの業を

呪うことはなかったのだろうか



正月一日

吉原唯一の
休業日



ここで死んだ妓は
裏口から誰にも
見られないように
そっと出て行く



こんなに静かな日は
一日だけだ



この雪も
明日からまた



泥にまみれる
のだらう